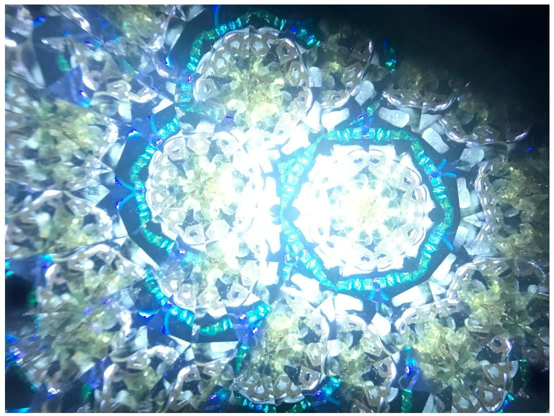

# [明石国行×女審神者]
## 丁寧な恋愛
## あるいは万華鏡の表情

佐藤こおり

「丁寧な恋愛、か」
読み終えた恋愛小説を机に置く。夏はどうにも苦手で現世での仕事もいまいち捗らないし、本丸に来てもだらだらと過ごしてしまうことが多い。椅子からずり落ちながらため息をつく。
丁寧な恋愛、そんなものが今更できるとして相手に思い浮かぶのは明石。私の近侍で来派の太祖、本体は国宝の明石国行だ。この本丸では知られてしまっているが明石と私はいわゆる恋仲ではある。そんな明石は私が審神者の仕事をほったらかしているのをいいことに、愛染国俊と蛍丸を連れて万屋へ行ってしまった。クーラーの効いた執務室から出るのもおっくうで読みさしだった小説を読んでいた、とそう言うわけだ。



「……明石は丁寧なのよね」
絶対に声を荒らげないし穏やか。面倒見もいいし優しい。夜だって私が嫌がることは絶対にしない。やる気のないのがウリだとは言うが、働き者だし丁寧なのだ。となると問題は私。椅子からさらにずり落ちながら呻いてみる。この歳なのでそれなりに恋愛経験もあるが、家事をしないからとフラれたり、飯がまずいからとフラれたり、怒りっぽいからとフラれたり。はあ、とまたため息が出る。要するにあまり美徳とさ



れる方の女らしさがないのだ。これ以上ずり落ちると椅子からお尻が落ちてしまうので座り直す。
「早く帰ってこないかな……」
「自分のことですか？」
声にびっくりしてしまった。内番着の明石がそこに立っていたから。近付いてきた明石はちらりと机の上の本を見て、おやおや、と笑いまじりの声を出した。
「恋愛小説読んで恋しくなってくれたん？　嬉しいなあ」



「な、え、もう。そんなんじゃないわ」
そうですか、と明石はごそごそと万屋の紙袋をあさっている。疑問に思いその様子を眺めていると、目の前にアイスクリームが置かれた。
「主はん、クッキークリームがお好きでしたよな」
まあアイスでも食べて、のんびりしましょ。そう言って明石はアイスクリームの蓋を開けてくれた。蓋はどこに行くのかと目で追っていると、明石が目を閉じ舌を出して、べろ、と舐めた。セクシーさにどぎまぎしていると明石は目をゆっくりと開け、眼鏡の奥で萌黄色の瞳が私を見据える。
「主はんのすけべ」



顔が、熱い。明石がえっちなのがいけないのよ、なんて思っても口には出せず、アイスクリームに匙を入れる。掬って口に入れると冷たく甘い。
「あーそうそう」
ええもん見つけたんですわ、と明石がまた紙袋をごそごそする。取り出されたのは短い棒、のようなものだった。
「覗いてみてください」
言われた通りに手に取り覗き込む。キラキラとした透明なビーズ、手を動かせば無限に模様が変化する。万華鏡だ。
「青と緑に少しだけ赤の入って、金魚みたいで涼しげですやろ？」
主はんにあげますわ。
そう言うと明石は私の頬に触れるだけのキスをした。慌てて顔を万華鏡から上げる。満足そうな明石の顔。



「ほんま飽きへんなあ」
「……なにが？」
主はんの表情、と明石は言った。くるくる変わって万華鏡みたいや、と。
「これからもいろんな顔、見せてくださいね」
明石はそう言って私の髪をそっと梳いた。

—了—



QRコードは匿名・選択式の感想アンケートです。よろしければご回答をお願いいたします。

奥付
発行日　2021.08.29
発行者　佐藤こおり
Twitter　@ice03g

※出自は夢ですが、現在はBLメインで活動しています。フォローの際はご注意ください。